慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	構築される「遺跡」：KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの
Sub Title	Who forms archaeological sites-in what manner?
Author	安藤, 広道(Ando, Hiromichi) 山口, 徹(Yamaguchi, Toru) 岩浪, 雛子(Iwanami, Hinako) 畑中, 乃咲佳(Hatanaka, Noeka) 山口, 舞桜(Yamaguchi, Mao) 本間, 友(Homma, Yu) 長谷川, 紫穂(Hasegawa, Shiho) 山田, 桂子(Yamada, Katsurako)
Publisher	慶應義塾ミュージアム・コモンズ
Publication year	2023
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	開催日：2023年3月6日 (月)-4月27日 (木) 開催場所：慶應義塾ミュージアム・コモンズ
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO10007004-00000008-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

構築される「遺跡」

KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの

Who Forms Archaeological Sites — in What Manner?

「遺跡」とは何だろうか。一般には、歴史として語られる過去に属する、人々の活動の痕跡が存在する場所をいう。多くの場合、そうした痕跡は地中に埋もれているため、「遺跡」の内容を知るには発掘調査が必要になる。

４年ほど前、慶應義塾（私たち民族学考古学研究室）は、今 KeMCo が建っている場所で発掘を行った。この地に残されていた過去の痕跡を、建物の工事で壊されてしまう前に発掘し、記録と遺物を将来の研究や教育に活用できるように保存するためのものである。私たちはこの発掘によって、縄文時代から江戸時代までのさまざまな痕跡を発見し、多くの記録と遺物を残すことができた。発掘で得られた成果は、三田キャンパスあるいは港区一帯の歴史を研究し語るうえで、今後欠かすことのできないものになっていくと確信している。

一方、私たちはこの発掘で、この地に残る過去の痕跡のすべてを発掘したわけではなかった。例えば、地質や化石などの自然現象の痕跡や、明治期以降の近代・現代の痕跡についてはほとんど発掘していない。実は発掘は、痕跡を選択する行為なのであり、どんな痕跡をどのように発掘するかによって、「遺跡」の範囲や内容は異なるものとなる。つまり「遺跡」と「遺跡」を通して語られる「歴史」は、発掘を行う側の選択によって構築されるものなのである。

発掘において、どんな痕跡をどのように発掘するのか。この点に関しては、文化財保護を担う文化庁や自治体の教育委員会が、学術研究の成果に基づいた基準を設けている。発掘を行う側は、その基準をベースに発掘に関わる諸条件を勘案して選択の範囲を決定する。

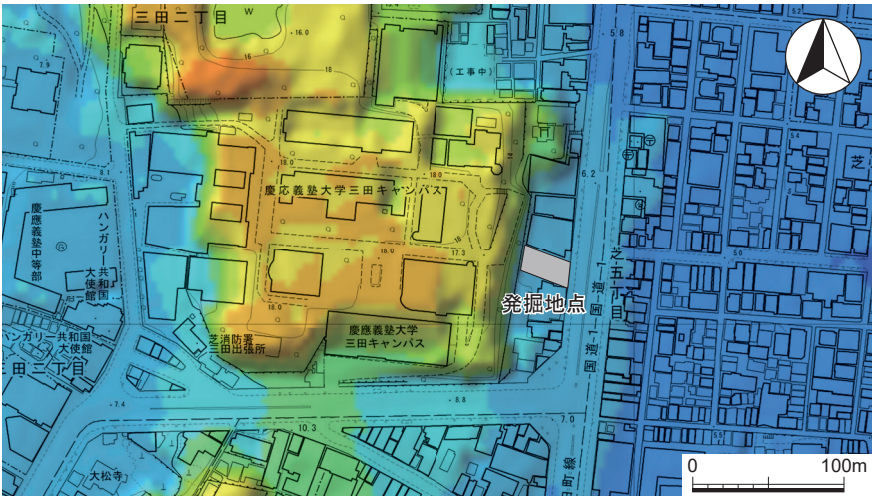
ただ、「歴史」は、視点の違いによって幾通りにも語り得るものである。また、ある場所の過去は、多様なかたちで私たち一人ひとりと結びついている。ある視点で選択から漏れた痕跡が、別の視点で大きな意味をもつこともあるはずである。他方、あまり知られていないことだが、一度発掘した場所はどんなことをしても元には戻せない。「遺跡」の内容は発掘しなければ分からないが、発掘すれば「遺跡」の大半は破壊され、選択から漏れた痕跡は陽の目を見ることなく消滅してしまう。発掘における選択のあり方に唯一の正解はなく、私たちは常にそれを問い直し続けながら発掘を行う必要がある。

そこでこの展覧会では、KeMCo の発掘によって得られた成果だけでなく、選択しなかった痕跡にも目を向けることにした。これまであまりなかった試みである。私たちが構築した「遺跡」をいったん解体してみることを通して、今後一人ひとりが「遺跡」と「歴史」の構築にどのように向き合い、関わっていくことができるのかを考えるきっかけにしてもらいたいと思っている。（安藤広道）

1 発掘のあらまし

2016 年、一般社団法人センチュリー財団からの美術品寄贈を機に、学術資料展示施設の建設計画がスタートした。翌年には港区教育委員会によって埋蔵文化財の有無を確認するための試掘が行われ、建設予定地内に江戸時代の暮らしの痕跡が埋もれていることが判明した。この地は文化財保護法の保護対象である埋蔵文化財包蔵地「三田二丁目町屋跡遺跡」として登録され、同法に基づき、工事で失われる埋蔵文化財の記録と遺物を残すため、慶應義塾が発掘を行うことになった。発掘はトキオ文化財株式会社（当時は共和開発株式会社）に委託し、2018 年 11 月 27 日～翌年 4 月 5 日と 6 月 11 日～ 14 日に実施された。

発掘の結果、地層の上部からは、江戸時代の町屋の暮らしを物語るさまざまな遺構と、陶磁器を中心とする多量の遺物が検出された。一方、その下の地層からは、想定していなかった中世から弥生時代に至る遺構と遺物が次々と発見され、一帯の中世以前の歴史を大きく書き換える成果となった。（安藤広道）



[図 1] **発掘地点（KeMCo の場所）**　発掘地点が三田の台地の直下であることがわかる。

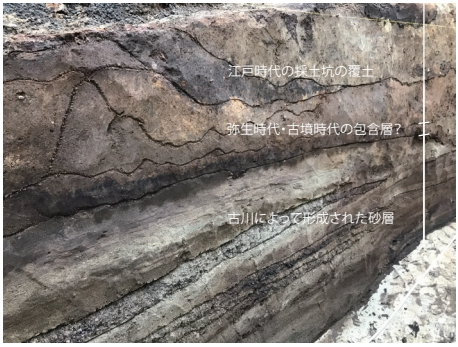
[写真 1] **発掘範囲**　対象エリアを 1/3 ずつ発掘した。

[写真 2] **発掘風景**　近世建物跡の発掘。

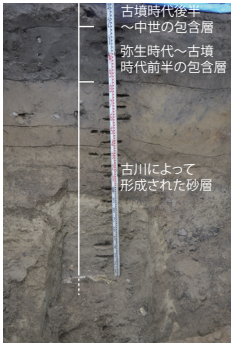
2 地形の形成過程を調査する

KeMCo の建つ場所は、海抜７mと意外と標高がある。発掘の対象にした江戸～弥生時代の遺物を含む地層を掘り下げていくと、海抜５m付近からは遺物を含まない砂層が現れる。私たちは、弥生時代以降恒常的に人々の生活の舞台になっていた、この地の地形の特徴とその成り立ちを明らかにするため、砂層以下の地層の調査を実施した。

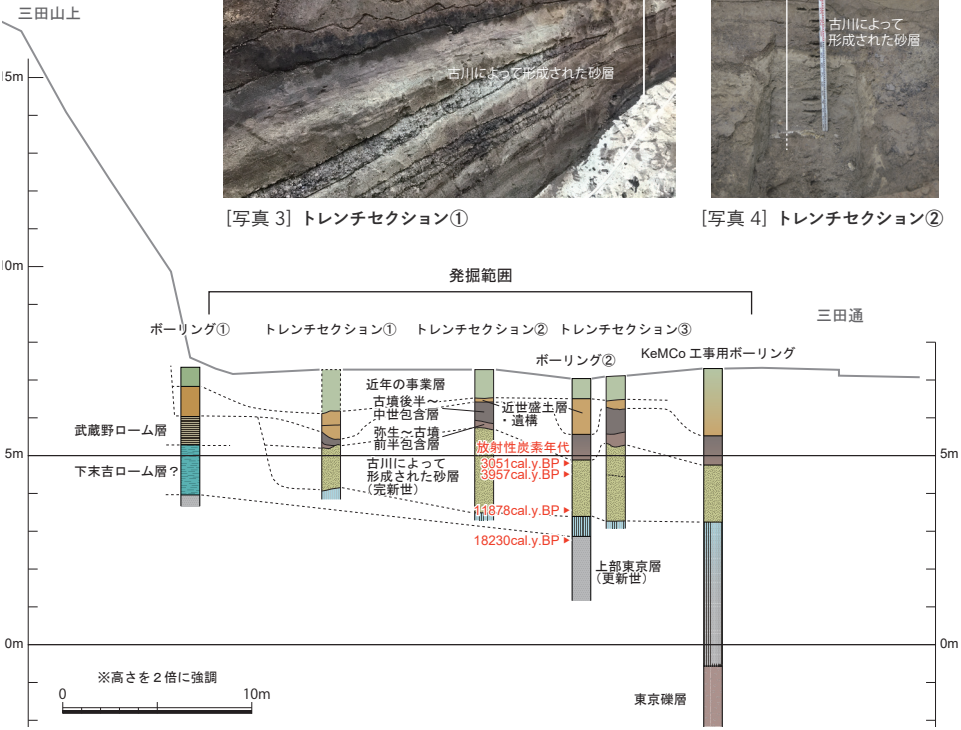
その結果、砂層は２m程度の厚さがあり、古川が 12000 年前から 3000 年前までに運んできた堆積物である可能性が高いことが分かってきた。その下には約２万年前までに堆積した砂礫層が３mほど続き（上部東京層）、海抜０m 付近からは、12 万年前以前に堆積した東京礫層に移行する。この一帯は締まった厚い砂礫の地盤をもつ微高地だったのである。3000 年前ごろ海面が少し下がる時期があり、そのころに古川の流路がこの場所から離れたことで、植物が繁茂する安定した土地へと移り変わっていく。こうして水はけの良い、居住や通行に適した場所が形成されていったと考えられる。（安藤広道・山口徹）



［写真 3］**トレンチセクション①**



［写真 4］**トレンチセクション②**



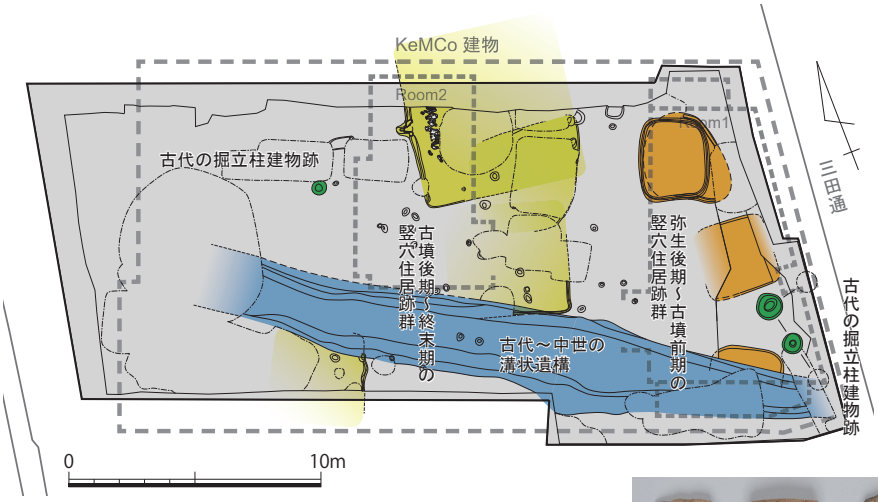
［図 2］**発掘範囲の地層**　厚い砂礫層の上に弥生時代以降の生活の痕跡が積み重なっていったことが分かる。

3

弥生時代〜古墳時代
道が集落をつくる

三田キャンパスがある武蔵野台地東部では、縄文時代から弥生時代を通して、基本的に台地の上に集落が形成されてきた。竪穴住居の暮らしは、台地の上が快適だったのだと考えられる。これに対し、弥生時代終わりころから、低地の集落がみられるようになる。本遺跡の集落もそうした動きの一環だと思われるが、本遺跡のように台地下の微高地で弥生時代〜古墳時代の集落が発見されることはこれまでなかった。

弥生・古墳時代の人々が台地から降り、この地で暮らし始めた理由として、私たちは「道」との関連を想定した。鉄などの生活必需品の外部依存度が高まっていくことで、人と物が動く道の役割が大きくなり、居住場所が道に沿って形成されるようになったとみている。現在 KeMCo が面する三田通は中世の中原道と考えられる。この道は、集落や古墳の位置からみて古墳時代前期には存在していた可能性が高く、今回の成果により弥生時代にまで遡ることが想定できるようになった。（畑中乃咲佳）

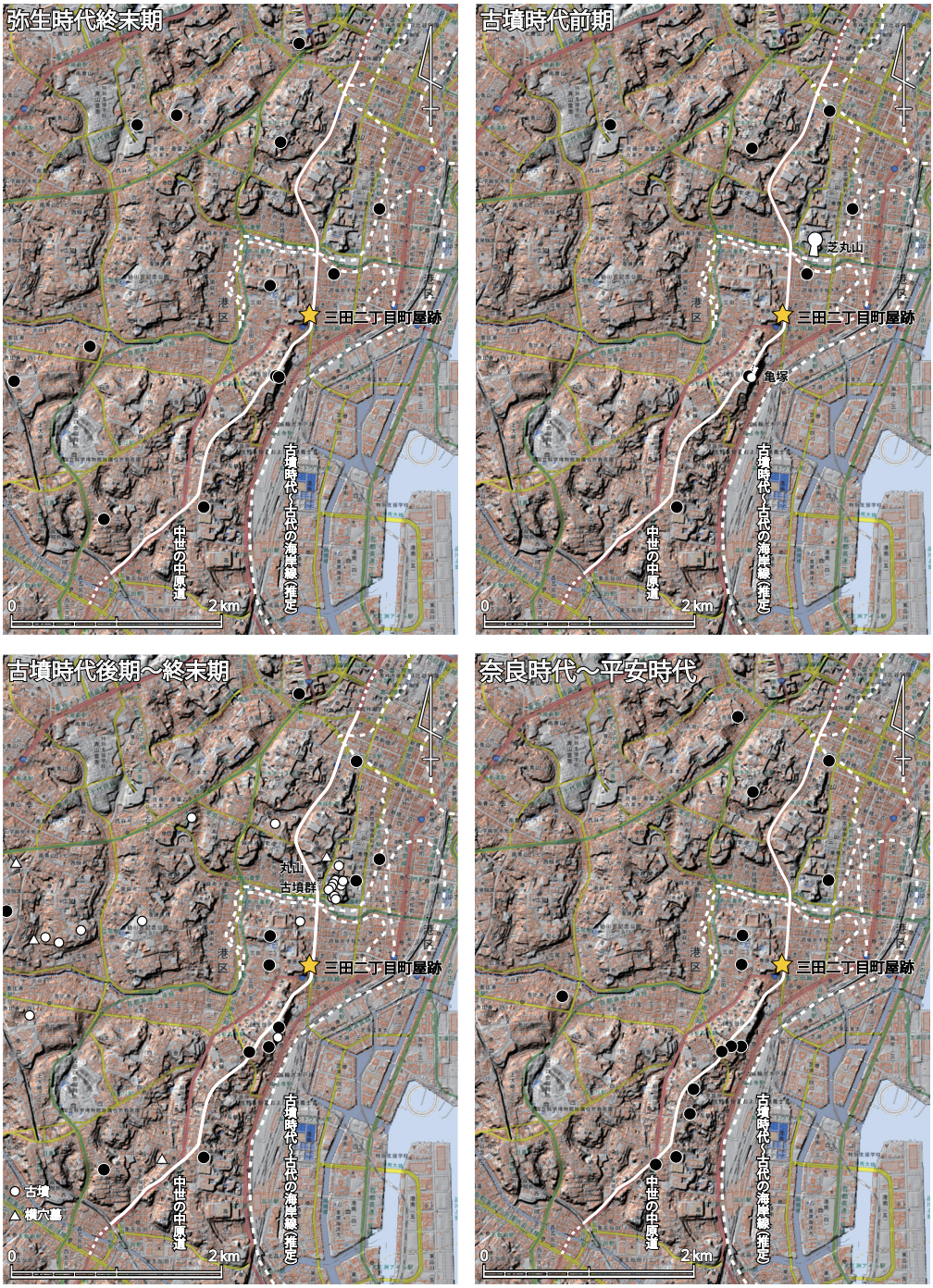


［図 3］**弥生時代〜古代の遺構**

［写真 5］**弥生時代の住居跡**
掘り残した土手は土層観察用のもの。

［写真 6］**弥生土器破片**
右下は輪積装飾の甕、他は縄文や赤彩で装飾された壺。弥生後期 - 終末期・2-3 世紀

［写真 7］**高坏形土器**
東海地方西部の特徴をもつ。弥生後期・2-3 世紀



［図 4］**弥生時代終末期～古代の遺跡分布**　古墳時代前期以降、中原道に沿って多くの遺跡が展開するようになる。

4

古代〜中世
人とモノが行き交う

古代〜中世において、この地は武蔵国荏原郡に立地していた。古代（奈良〜平安時代）の痕跡としては、大型の掘立柱建物跡、硯や灰釉陶器など、この地が一般の集落とは異なる場所であったことを示唆するものが見つかった。大きな溝の掘削も古代に遡る可能性が高い。この地の機能の特定は難しいが、文字を書く人々がいたことは間違いない。中世（鎌倉〜戦国時代）では、溝がそのまま使われており、近世の遺構からも遺物が出土した。常滑産・渥美産の大甕や常滑産三筋壺、瀬戸産の花瓶、舶載磁器などが含まれ、板碑や瓦もみられる。いずれも中世の遺物において注目すべき資料群であり、この地には寺院や武士層の屋敷があったことが推定される。

これら古代〜中世の遺物は、正面に南北に伸びる中原道（現在の三田通り）を行き交う人々によってもたらされたのだろう。この地がおよそ 900 年にわたり一帯の拠点、交通の要衝だったことをうかがわせる。（岩浪雛子）

［写真 8］**硯と刀子**　左上は須恵器坏の転用硯、右上は円面硯。刀子は木簡を削るために使用したか。この地に「刀筆吏（とうひつり）」がいたことを物語るようである。8 世紀（刀子は古墳時代 – 古代）

［写真 9］**灰釉陶器片**
大半は埦、僅かに壺や瓶がある。9-11 世紀

［写真 10］**渥美産・常滑産陶器**　左 2 点は押印文のある渥美産甕。右上は刻画文のある常滑産甕。右下は常滑産三筋壺。12-13 世紀

［写真 11］**瀬戸・美濃産陶器**
上は皿、下は花瓶。15 - 16 世紀

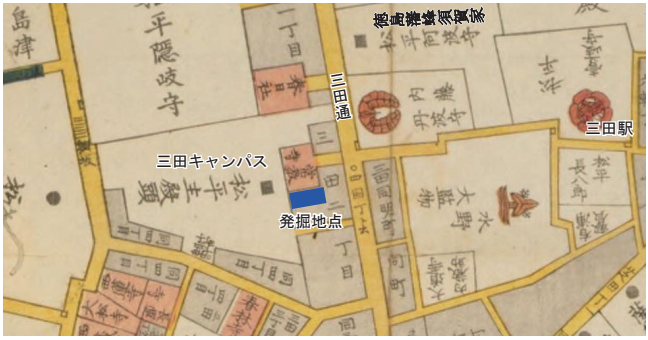
［写真 12］**布目瓦**　16 世紀

5 近世 垣間見える町屋の暮らし

この地は江戸時代を通じて町人地であり、特に町屋の裏手空間にあたる。その痕跡は、18 世紀中ごろを境に前後で様相が異なる。

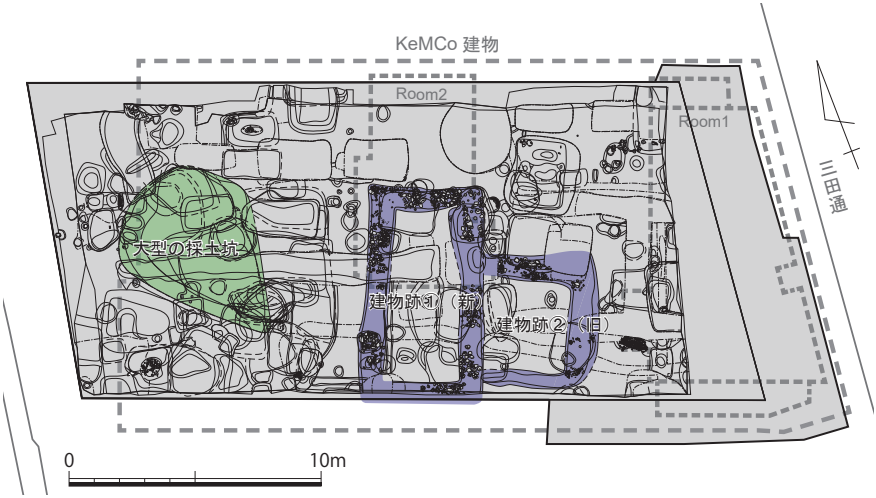
18 世紀中ごろ以前は、普請に必要な土を採掘した採土坑が複数みつかった。大型の採土坑やその周辺の遺構からは、近隣の大名屋敷から持ち込まれたと思われる町屋では珍しい遺物がみつかった。中には、三田通の向いに屋敷を構えていた阿波徳島藩蜂須賀家の定紋でもある「卍」文の軒丸瓦も含まれる。この時期の町屋の人々が、時に土砂を供出したり周辺藩邸からゴミを受け入れたりして収入を得ていたことがうかがわれる。

18 世紀中ごろ以後になると、酒などを販売するための瓶である「通い徳利」の出土量が著しく増加する。また、その多くに「うちた」という釘書きが確認され、文献史料の情報も照合すると、この地には酒屋「内田屋」があったと推測される。揃いの食器類や町屋としては珍しい高級貝のアワビ、切創をもつ牛骨なども注目され、酒の販売だけでなく食事も供していた可能性が高い。（岩浪雛子）



［図 5］**発掘地点周辺の江戸後期の地図**
灰色は町人地、赤は寺社地、白は武家屋敷。春日神社やその前面の三田通、都営三田線三田駅方面に向かう道など、現在と同じ土地区画が見てとれる。

「江戸切絵図　芝高輪辺絵図」
嘉永 2 - 文久 2(1849-62) 刊
国立国会図書館蔵



［図 6］**18 世紀中ごろまでの遺構**
建物跡と採土坑に色をつけた。通り側に建物があり、奥庭で採土やゴミ埋めをしていたことがわかる。

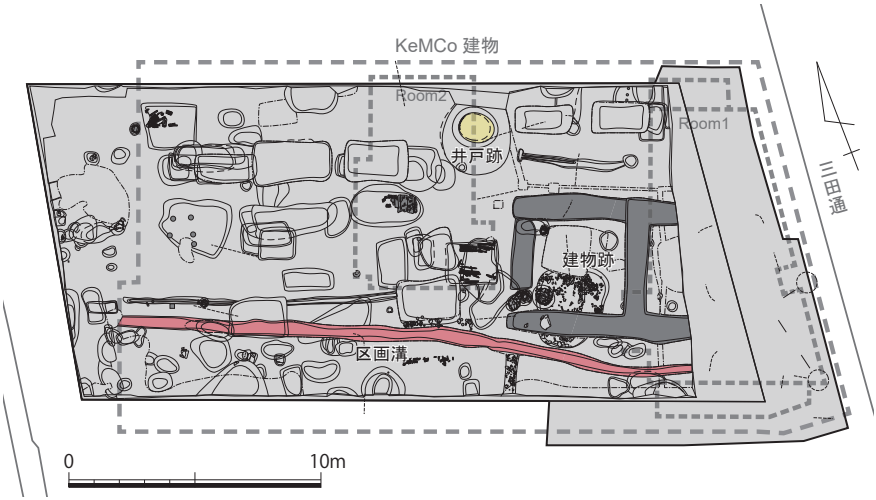
[写真 13] **大名屋敷のゴミと考えられる遺物**
上 2 点は肥前産磁器皿。左は瀬戸・美濃産の天目茶碗。右下 2 点は儀礼に用いられたと考えられる燈明皿。17-18 世紀

[写真 14]**「金」銘の皿**
最上手の磁器を生産していた柿右衛門窯のもの。17 世紀

[写真 15] **華南三彩壺（中国）**
16-17 世紀に生産されたもの。
大名屋敷で使用されたものと考えられる。

◀ [写真 16]**「卍」文軒丸瓦**
卍は徳島藩蜂須賀家の定紋。三田通の東にあった蜂須賀家（松平阿波守）屋敷（図 5 参照）のゴミである可能性がある。17-18 世紀

▼ [写真 17] **漆器椀**
これらも大名屋敷のゴミである可能性が高い。17 世紀



［図 7］**18 世紀中ごろ以降の遺構**　建物跡・井戸・区画溝に色をつけた。やはり通り側に建物があり、西側が奥庭になっていたようである。区画溝は隣の町屋との境界か。

［写真 19］
「うちた」の釘書き
瀬戸・美濃産の通い徳利。18-19 世紀

◀［写真 18］**「三田二町」と書かれた肥前産徳利**　18-19 世紀

［写真 20］**揃いの器と「うちた」徳利**　発掘地点からは揃いの器形・文様の食器が多数出土した。鉢・猪口・碗は肥前産磁器、徳利は瀬戸・美濃産陶器。18-19 世紀

6 KeMCoで発掘したもの・しなかったもの

KeMCo で行った発掘は、文化財保護法に基づいて、工事で失われる埋蔵文化財の記録と遺物を残すためのものであった。これを記録保存調査という。記録保存調査を含む埋蔵文化財の保護は、法的根拠をもって国民に等しく求められるものである。そのため国や自治体は、何をどのように保護すればいいのかという基準を示してきた。港区では『港区埋蔵文化財取扱要綱』としてまとめられ公開されている。記録保存調査の実施にあたっては、こうした基準をベースに、発掘にかけられる期間や費用との兼ね合いのなかで、何をどのように発掘するかを決めていく。

KeMCo の発掘では、港区の『要綱』から大きく対象を広げることはできなかった。工事開始までの発掘可能な期間が限られていたことが最も大きな理由である。また、大通りに面していて掘った土を外に出すことができなかった点や、近年の整地で江戸時代の地層の上部まで削平されていた点などの、この地に特有の条件も判断に深く関係していた。（安藤広道）

［写真 21］**発掘で出土した近現代の遺物**　発掘の対象としなかった近年の事業層から、また近世の遺構に混ざりこむかたちで近現代の遺物が出土した。19-20 世紀

『港区埋蔵文化財取扱要綱』（抜粋）

第 1 条　この要綱は、文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号、以下「法」という。）に基づく埋蔵文化財に関する取扱いを明示し、埋蔵文化財に関する事務を円滑に進め、港区内における埋蔵文化財の保存及び活用を図ることで区民の文化の向上と発展に貢献することを目的とする。

第 2 条　港区教育委員会（以下「教育委員会」という。）が埋蔵文化財の発掘調査対象とするものは、次の各号のとおりとする。

(1)　原始・古代から近世までに属する遺跡とする。

(2)　近代・現代に属する遺跡は、地域の歴史の理解に欠くことのできない遺跡等特に定めるものは対象とすることができる。

第 4 条　教育委員会は、試掘・確認調査等により遺跡が確認された場合においては、開発者に対して埋蔵文化財保護措置のための必要な指導及び助言を行う。

第 5 条　（中略）教育委員会は、前項の規定に基づく協議の結果、当該埋蔵文化財包蔵地 (遺跡) の一部または全ての現状保存が困難な場合は、開発者と工事計画等を調整の上、調査の規模・期間・内容・方法等を決定し、発掘調査の実施を指導する。

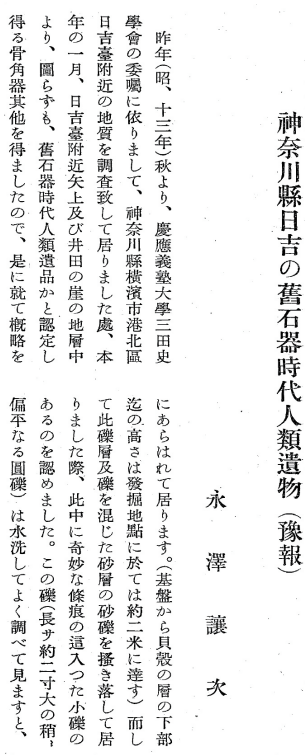
7 日吉キャンパスで発掘したもの・しなかったもの

私たちは、日吉キャンパスでも多くの記録保存調査を行ってきた。日吉キャンパスは、弥生時代・古墳時代の大規模な遺跡として知られているほか、アジア太平洋戦争期には連合艦隊司令部をはじめ帝国海軍の重要部局の基地となり、戦後は米軍に接収されるといった歴史をもつ。こうした戦争関係の痕跡は、横浜市の基準では最近まで保護対象になっていなかったものの、慶應義塾は独自の判断で、海軍や米軍関係の遺構を発掘してきた。

しかし、戦争以外の痕跡となると、私たちはほとんど選択してこなかった。これまでの発掘でも、学食の食器をはじめキャンパスの歩みを物語るさまざまな痕跡が発見されてきたが、時間をかけて発掘することはなかった。また、キャンパス一帯では、古くからゾウやシカの化石が発見されており、キャンパス内にも存在する可能性が高い。しかし現在の埋蔵文化財保護の枠組みからは、こうした自然現象の痕跡は抜け落ちているし、私たちも全く目を向けてこなかった。（安藤広道）

［写真 22］**2008 年に行った帝国海軍地下壕の発掘**

［写真 23］**発掘で出土した学食の食器**　梅鮨は日吉キャンパス開校からほどなく、グリーンハウスは 1950 年に開店（グリーンハウスの名称は 1954 年から）。これらはそれぞれの初期の食器か。



神奈川縣日吉の舊石器時代人類遺物（豫報）

永澤譲次

昨年（昭、十三年）秋より、慶應義塾大學三田史學會の委囑に依りまして、神奈川縣横濱市港北區日吉臺附近の地質を調査致して居りました處、本年の一月、日吉臺附近矢上及び井田の崖の地層中より、圖らずも、舊石器時代人類遺品かと認定し得る骨角器其他を得ましたので、是に就て概略をにあらはれて居ります。（基盤から貝殻の層の下部迄の高さは發掘地點に於ては約二米に達す）而して此礫層及礫を混じた砂層の砂礫を掻き落して居りました際、此中に奇妙な條痕の這入つた小礫のあるのを認めました。この礫（長サ約二寸大の稍偏平なる圓礫）は水洗してよく調べて見ますと、

［図 8］**日吉一帯における化石の報告**
『史学』第 18 巻第 1 号 1939 年
二ホンムカシジカやゾウの出土が報じられている。

8 三田山上は「遺跡」なのか

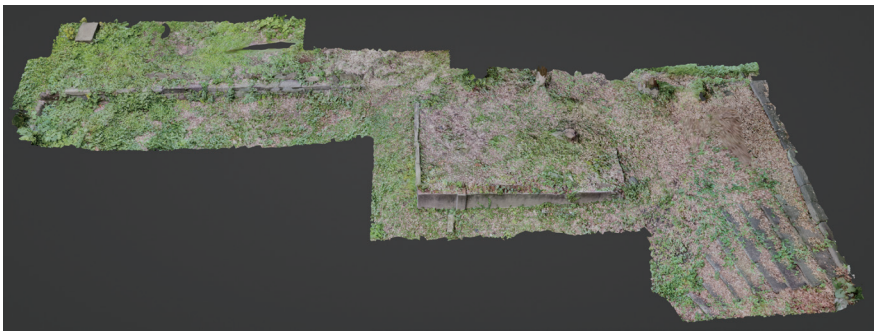
三田キャンパスの、いわゆる三田山上と呼ばれる台地上では、今日まで埋蔵文化財の記録保存調査は行われてこなかった。江戸時代の三田山上には島原藩の屋敷があり、中世以前の痕跡もあったはずであるが、それらは建物やインフラの工事によって、ほとんど破壊されてしまっているらしい。そのためこれまで行われてきた工事において、港区の『要綱』で保護対象となる近世以前の遺構が確認されてこなかったのである。

しかし三田山上を歩いてみると、1871（明治4）年に慶應義塾が移転してきてからの、義塾の歩みの痕跡が随所に残っていることに気づく。これまでも、空襲で被災したステンドグラスの破片や考古学教室の資料が見つかってきたし、工事のたびに慶應義塾関係の痕跡は数多く発見されてきた。私たちは、三田キャンパスの調査を進めるなかで、福澤諭吉邸の基礎の一部が残っていることも確認した。もし三田山上を発掘すれば、慶應義塾史の新たな側面が見えてくるに違いない。（安藤広道）

[写真 24] **2008 年のゴミ集積場の工事**
多数の煉瓦と煉瓦建物の破片が出土した。

[写真 25]
出土した煉瓦建物の破片
ゴミ集積場はかつて大講堂があった場所に近い。この破片も大講堂のものである可能性がある。

[写真 26]
複雑な来歴をもつ近世の焼塩壺
1937 年の第一校舎建設時に出土。1945 年の空襲で被災したものの運よく回収された。その時点で出土情報が失われてしまったが、2020 年の調査でその来歴が再び明らかになった。



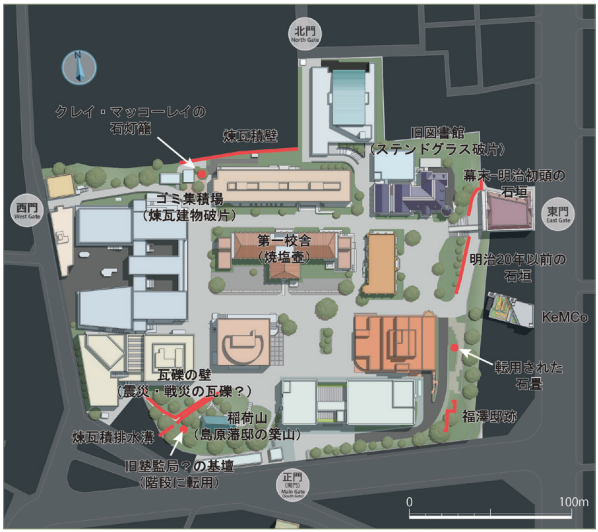
[写真 27] **福澤諭吉邸の基礎**　左奥の石段は母屋の基礎。右に張り出した正方形の基礎は煉瓦積み。

9 三田キャンパスで過去の痕跡を探す

私たちの身の周りには、いたるところに過去の痕跡が存在する。そこで試みに、三田山上で地面に落ちているモノを採集してみることにした。日々清掃されているものの、それでも陶磁器片、レンガ、ガラス、壁材、コピーカードや用途の分からないものなど、さまざまなモノが採集できた。

これらのほとんどは、通常ゴミとしてしか認識されないものであろう。しかし、どれも誰かが作り使用したモノたちであり、一つひとつがさまざまな過去と結びついているはずである。見る人が見れば何であるかを同定でき、そこから過去が語られ始める。見つけた人、触れた人の過去とつながることでその人の宝物になることもあるだろう。なかには学問的あるいは慶應義塾にとって重要なモノがないとも言えない。発掘や埋蔵文化財保護の枠組みから外れたものに目を向けてみると、さまざまな過去への想像が拡がっていく。こうした過去への眼差しが、いつか発掘における選択に結びつくことがあるかも知れない。（山口舞桜）

［写真28］**収集したモノたち**
近世以降、現代までのさまざまなモノが収集された。左の瓦のような板は、関東大地震で落下した演説館の壁材の可能性がある。



［写真29］**調査風景（福澤邸跡）**

▶［写真30］**見つかった近世の徳利**

◀［図9］**三田山上の過去の痕跡（戦前の主なもの）**

Who Forms Archaeological Sites — in What Manner?

What are 'archaeological sites'? Generally, an archaeological site is any place where traces of people's activities from the historical past exist, most of which are under the ground. Therefore, excavations are necessary to reveal the contents of these archaeological sites.
When Keio University built the Keio Museum Commons (KeMCo), it excavated the site to preserve the records and artefacts at risk of being destroyed during construction. As a result of this excavation, we found various traces from the Edo period to the Jomon period among other findings. This, however, does not mean that all traces in the area were unearthed. For example, traces of natural phenomena and the modern period were not covered. This brings into focus that excavation is, in fact, an act of selecting traces, which dictates how we construct the 'archaeological site' and the 'history' told there.
This exhibition highlights the results of what was – and wasn't – selected. Dismantling the framework which constructs archaeological sites is an excellent opportunity for participants to question the status of 'archaeological sites' and 'history'.

Exhibition guide

1 Overview of the Excavation

In 2017, it was confirmed that traces of life in the Edo period were buried in the planned KeMCo construction site. The Minato-ku Board of Education then registered the site as a buried cultural property inclusion site, 'Mita 2-chome Machiya Site', which should be protected under the Cultural Property Protection Law. Therefore, according to that law, we commissioned TOKIO-bunkazai Co.,Ltd. excavation work from November 27, 2018, to April 5, 2019, and June 11-14, 2019, to record traces and preserve archaeological objects that would be lost in the construction of the new building.
As a result of the excavation, various structural remains and many objects, mainly ceramics, were excavated from the upper stratum, which tells the story of life in the Edo period townhouse. On the other hand, from the lower stratum, unexpected records and objects from the Middle Ages to the Yayoi period were discovered one after another, which greatly rewrote the history before the Middle Age of the area.

2 Investigation of the topographical formation process

This site locates at a high altitude of 7m above sea level. The sand layer appears from around 5m above sea level, below the layer containing artefacts from the Edo to the Yayoi period, which was the target of our excavation. We also investigated the geological stratum below the sand layer to clarify this site's topographical characteristics and formation, which has embraced people's lives since the Yayoi period. The sand layer is likely to be sediments carried by the *Furukawa* River up to 3,000 years ago. Below the sand layer, a sand and gravel layer deposited up to about 20,000 years ago continues for about 3m. From about 0m above sea level, the layer shifts to the 120,000-year-old Tokyo Gravel layer. The site was slightly elevated with firm sand and gravel ground. Around 3,000 years ago, a little drop in the sea level made the *Furukawa* River flow away from this area. We think that this is how the well-drained, livable land was formed.

3 From the Yayoi to the Kofun period: Roads give rise to settlements

In this excavation, we found several pit dwellings dating from the late Yayoi period to the end of the Kofun period. In the eastern part of the Musashino Plateau, settlements were generally located on the uplands since the Jomon period. However, they also founded in the lowlands at the end of the Yayoi period.It is

rare, however, to find them on a slightly elevated area below the plateau like here.
What we presume is a link with 'roads'. Towards the end of the Yayoi period, household necessities such as iron became increasingly dependent on external sources, and the role of roads for the movement of people and goods probably increased. *Mita-dori*, which KeMCo faces, is considered *Nakahara-do* in the Middle Ages. It is assumed that this road already existed in the early Kofun period, based on the location of settlements and burial mounds. This excavation revealed the possibility that the road may date back to the Yayoi period.

4 From Antiquity to the Middle Ages: Comings and goings of people and objects

Traces of ancient times (Nara-Heian period) were found, including the remains of a large embedded-pillar building, an inkstone and ash-glazed pottery. These traces suggest the site was different from ordinary settlements. The large ditch is likely to date back to antiquity. It is difficult to determine the function of this site, but there is no doubt that there were people who used and wrote characters.
In the Middle Ages (Kamakura-Sengoku period), the ditch was continuously used, and artefacts were discovered from the early modern remains. These include three-stripe-designed jars from Tokoname, large jars from Tokoname and Atsumi, vases from Seto and imported porcelain, while stone monument and roof tiles were also found. We assume the presence of temples and residences of the warrior class from these artefacts.
People passing along the Nakahara-do probably brought these ancient and medieval artefacts here. This area might be this region's hub and strategic traffic point for approximately 900 years.

5 The early modern period: Glimpses of life in townhouses

The area was a commoner district throughout the Edo period, but the site's character differed before and after the middle of the 18th century. We found several large pits before the mid-18th century, where the earth and sand was taken to develop towns and houses. In those pits and the surrounding remains from the same period, imported ceramics such as *Kanansansai-tsubo* (South China Three-color Grazed Jar) and Vietnamese long-bodied jars were found, as well as lacquerware bowls, tea ceremony tools, and lamp dishes with ink writing related to *Samurai* Ceremonies. It is highly possible that these items were used in neighbouring *Daimyo*'s residences. Here we excavated round eaves tiles with a '*Manji* (swastika)' design, which is the official crest of the *Hachisuka* family of the *Awa Tokushima* Clan, who had a house opposite *Mita-dori*. It suggests that the people who lived in the townhouse during this period sometimes earned incomes by offering soil and sand or accepting rubbish from the surrounding *Daimyo* residences.
From the mid-18th century onwards, there was a marked increase in the amount of bottles excavated. They were used for selling liquor and other items, known as '*Kayoi-dokkuri*'. The nail inscriptions '*uchita*' was also identified on many of these bottles. We assume it refers to the sake shop *Uchida-ya*, which had its head office in Yushima Yokocho (now Bunkyo-ku) and opened shops and sub-stores throughout the city. The reference documents also mention that 'Uchidaya Seizo and Ichirobei' dealt in special tax collection, money exchange, sake and *masu-zake* in Mita 2-Chome.
It is characteristic of this period that several sets of ceramics, such as bowls, plates and cups with the same design and shape, are found. We also focus on the excavated items, such as abalone, a rare high-grade shellfish for a townhouse, and a cattle bone with incised wounds. If there was an *Uchida-ya* in this area, it is highly possible that it served meals as well as alcohol.

6 What was and was not excavated at KeMCo

The excavations carried out during the KeMCo construction are basically rescue excavations which aim to keep records of buried cultural

property and archaeological objects that would be lost in the construction work. However, we did not investigate all the traces on the site. For example, we have hardly surveyed traces of natural phenomena or people's activities since the Meiji period. What we investigated was only a part of the traces.
Protecting buried cultural property under the Law on the Protection of Cultural Property is a public obligation. Therefore, the national and local governments have provided a framework for the objects to be protected and the investigation methods, which forms the selection criteria. On rescue excavation, based on these criteria, we must select what to and how to excavate in relation to the available time and budget. The 'archaeological site' is constructed through these selections.

7 What was and was not excavated at Hiyoshi Campus

We have also conducted rescue excavations on the Hiyoshi Campus. The Hiyoshi Campus has a history of being used as a base for the Navy during the Asia-Pacific War. Until recently, Yokohama City didn't consider traces from this period as the subject of its cultural property protection policy. However, Keio University, on its own initiatives, has excavated naval-related sites such as bunkers and the remains of the US military occupation era.
On the other hand, we need to pay more attention to the traces relating to the history of the campus itself. Several elephant and deer fossils were found around the campus area and probably would be inside the campus. But traces of such natural phenomena are not included in the framework of buried cultural property. It is necessary to occasionally take time to question these selection criteria.

8 Does the hill of Mita classify as an archaeological site?

On the hill of the Mita Campus, *Mita-sanjo*, no rescue excavation of buried cultural properties has been carried out. That is because the pre-modern remains protected by the *Minato-ku Outline for the Handling of Buried Cultural Properties*, as well as modern and contemporary remains that are 'indispensable for understanding the history of the area', have not been confirmed during several constructions on the *Mita-sanjo* so far.
However, walking around *Mita-sanjo*, we notice that the traces of Keio's history since its relocation in 1871 remain everywhere. Many such traces have been found in the construction work. We discovered a part of the foundation remains of the Fukuzawa Yukichi residence. If we excavate *Mita-sanjo*, new aspects of Keio's history will surely emerge.

9 Searching for traces of the past at Mita Campus

Traces of the past exist everywhere around us. Then, just as an attempt, we collected objects on the ground at the hill of Mita. Various objects were collected, including porcelain fragments, bricks, glass, wall materials, cards, etc.
Someone made and used these objects and must have various connections to the past. The trained eyes can identify what they are and draw stories about their past. The story may connect to the past of the people who found or touched them, and then the objects may become their treasure. The objects could be important for academic research or Keio's history. Looking at outside the framework of excavation and protection of buried cultural properties lets our imagination expand to the various pasts.

Related programme

Installation of *Mita Intercept_* (Kenji Yamada)
The public art Mita Intercept_ was created by artist Kenji Yamada as a virtual common space where citizens and students mingle in ruins excavated before the construction of Keio Museum Commons. This exhibition will show a video installation that records of the workshop to reactivate the relics in the project space to the present day as their activity for continuing the excavation openly.

展覧会
構築される「遺跡」：KeMCo で発掘したもの・しなかったもの

2023 年 3 月 6 日（月） – 4 月 27 日（木）
慶應義塾ミュージアム・コモンズ

主催 | 慶應義塾ミュージアム・コモンズ、慶應義塾大学民族学考古学研究室
協力 | トキオ文化財株式会社、深谷市教育委員会、福澤研究センター、五十嵐彰、猪原千恵、都倉武之、中野高久、中野光将、堀内秀樹、湯沢丈

企画 | 安藤広道・岩浪雛子・畑中乃咲佳・山口舞桜（慶應義塾大学民族学考古学研究室）、本間友・長谷川紫穂・山田桂子（慶應義塾ミュージアム・コモンズ）

資料補修・資料採集ほか | 五十嵐幸輝・和泉智也・加藤紘・京念屋圭樹・佐藤巧庸・田久保陽奈・高橋圭・中村謙伸・花牟禮優大・細井江実理・宮本皓平・宗吉若葉（慶應義塾大学・大学院）

広報物デザイン | 浦川彰太

カタログ
構築される「遺跡」：KeMCo で発掘したもの・しなかったもの
2023 年 3 月 6 日発行

執筆 | 安藤広道・山口徹（慶應義塾大学文学部教授）、岩浪雛子・畑中乃咲佳・山口舞桜（慶應義塾大学大学院文学研究科）

編集 | 安藤広道（慶應義塾大学文学部教授）、本間友・長谷川紫穂・山田桂子（慶應義塾ミュージアム・コモンズ）

発行 | 慶應義塾ミュージアム・コモンズ
〒 108-8345　東京都港区三田 2-15-45
Tel：03-5427-2021　Fax：03-5427-2022　https://kemco.keio.ac.jp/

Exhibition

Who Forms Archaeological Sites — in What Manner?
Archaeological objects excavated / not excavated at KeMCo's building site
Monday 6 March - Thursday 27 April 2023
Keio Museum Commons

Organisers | Keio Museum Commons, Department of Archaeology and Ethnology, Faculty of Letters, Keio University
Cooperation | TOKIO-bunkazai Co.,Ltd., Fukaya City Board of Education, Saitama Prefecture, Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Akira Igarashi, Chie Inohara, Takeyuki Tokura, Takahisa Nakano, Mitsumasa Nakano, Hideki Horiuchi, Takeshi Yuzawa

Curators | Hiromichi Ando, Hinako Iwanami, Noeka Hatanaka, Mao Yamaguchi (Department of Archaeology and Ethnology, Faculty of Letters, Keio University). Yu Homma, Shiho Hasegawa, Katsurako Yamada (Keio Museum Commons)

Restoration and collection of objects | Koki Igarashi, Tomoya Izumi, Hiro Kato, Tamaki Kyonenya, Koyo Sato, Hina Takubo, Kei Takahashi, Kenshin Nakamura, Yuki Hanamure, Emiri Hosoi, Kohei Miyamoto, Wakaba Muneyoshi (Keio University graduate and undergraduate school)

PR material design | Shota Urakawa

Catalogue

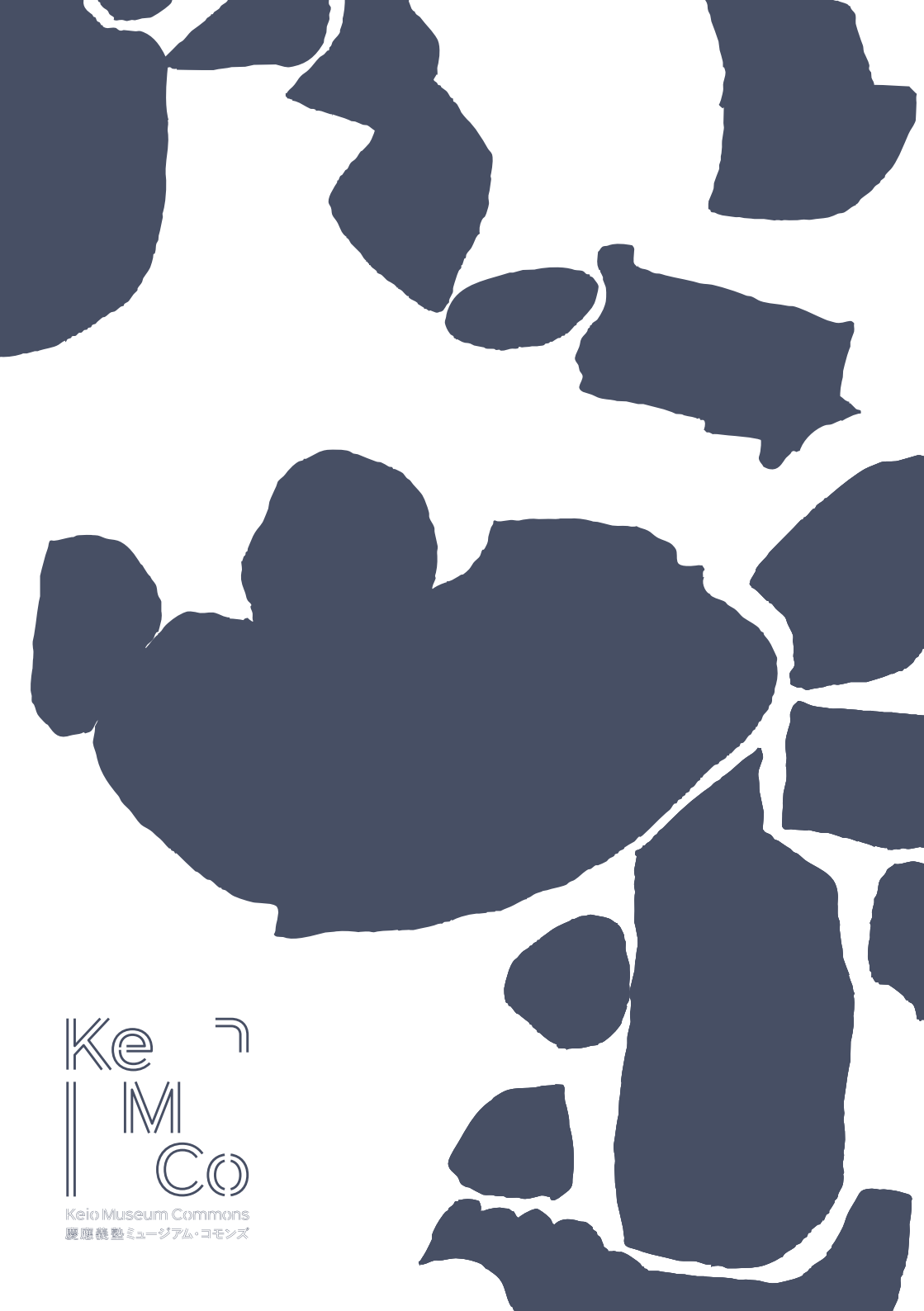
Who Forms Archaeological Sites — in What Manner?
Archaeological objects excavated / not excavated at KeMCo's building site
Published 6 March 2023

Written by Hiromichi Ando, Toru Yamaguchi (Professor, Faculty of Letters, Keio University), Hinako Iwanami, Noeka Hatanaka, Mao Yamaguchi (Graduate School of Letters, Keio University)

Edited by Hiromichi Ando (Professor, Faculty of Letters, Keio University), Yu Homma, Shiho Hasegawa, Katsurako Yamada (Keio Museum Commons)

Published by Keio Museum Commons
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345
Tel: 03-5427-2021 Fax: 03-5427-2022
hello@kemco.keio.ac.jp　https://kemco.keio.ac.jp/en/

KeMCo Brochures 2　ISSN 2758-5786 (Print)



Keio Museum Commons

慶應義塾ミュージアム・コモンズ